

コミュニティを基盤とした参加型研究方法 (Community-Based Participatory Research:CBPR) を 用いたコミュニティ・ニード調査

仲村秀子¹⁾、永井紀子²⁾、片桐成美²⁾、酒井昌子¹⁾、鈴木知代¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学看護学部、²⁾ 浜松市社会福祉協議会天竜地区センター

I. 事業の概要と目的

平成 22 年度浜松市都市と山村フレンドシップ事業で、本学教員と浜松市社会福祉協議会職員が打ち合わせ等を含めて交流する中で、佐久間地区社会福祉協議会が行う調査に協力することとなった。この調査は、これまで平成 7 年度・11 年度・17 年度に同一グループ（小地域福祉活動ボランティアと子育てグループ・子育て講座受講者）と同一個人（高齢者・障害者家族・片親世帯）を対象に行われてきた。今回の調査では、これまでの調査項目を踏襲し 15 年間の変化を把握する。また、新しい調査項目（災害時の不安と対応）を加え、6 年前とは異なってきた地域の実情を把握する内容になっている。更に、これまで同一であった調査対象者に、子育て講座受講者および移動児童館に来館した子ども（小学生）を加える。本学が調査協力するのは、この新しく加わった調査対象者に対する調査部分である。これら調査結果は、第 4 次地域福祉活動計画（平成 23 年度）中間見直し資料となる。

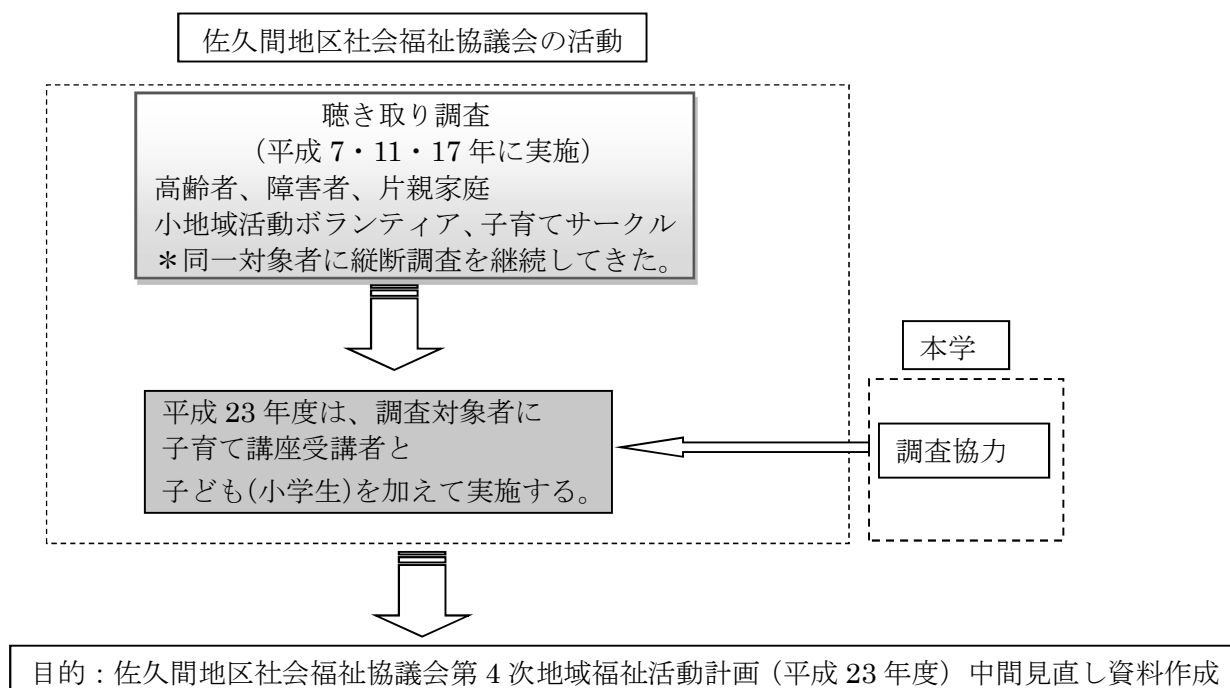


図 1 佐久間地区社会福祉協議会と本学の調査協力体制

II. 事業の実施内容

1. 調査対象者

- ①佐久間地区社会福祉協議会主催の子育て講座（2011年11月26日）受講者（13組）
- ②佐久間地区社会福祉協議会主催の移動児童館（2011年12月26日）に来館した子ども達（小中学生18名）

2. 調査項目

- ①子育て講座受講者：子供の将来に対する期待と不安、望むサービス、困った時の相談相手、社協に望むこと、災害時の不安と対応
- ②移動児童館に来館した子ども：将来の夢、暮らしやすさ・暮らしにくさ

3. 調査方法

- ①事前準備として2011年10～11月にかけて、本学調査協力学生（5名）に対して、佐久間地区の概況理解と聴き取り調査方法習得のために打ち合わせ会を行った。
- ②調査場面では、調査項目を個人ではなく対象者全体に投げかけ、自由な発言を促し、傾聴した。講座と移動児童館終了直後に、調査スタッフと調査協力学生が、発言内容を思い出して書きとめた。

4. 分析方法

- ①書きとったメモを基に、発言内容を個人ではなく調査項目ごとにまとめた。
- ②各調査項目に、発言内容を1つの意味で区切り、佐久間地区の地理的特性や生活を念頭に置きながら、発言内容を理解し（エスノグラフィー）、意味ごとに分類し、命名した。

III. 結果

1. 子育て講座受講者

1) 子供の将来に対する期待と不安

子育てしにくい現状が話された。子育てしにくい具体的な要因は5つに分けることができた。

①生活のしにくさ（近くに商店がないなどの理由による買い物が不便など）、②医療体制が不十分（佐久間町内の病院に小児科や産婦人科がないため不安など）、③遊び場がない（傾斜地が多く、公園などの空地がないなど）、④同年代の子供が少ない（近くに友達がいないから、車や電車で友達の家に来ていくなど）、⑤ゲームの長時間化（③と④のため、交通手段が確保できないと自宅で過ごす時間が多くなり1人でゲームをする時間が長くなるなど）が挙げられた。その反面、「子供が遊ぶ公園がないので、駐車場で遊ばせている。駐車場の利用者は、子供が遊んでいるのを了解し気をつけてくれているので、駐車場や道路でも十分遊べている。」という声もあり、遊び場がない半面、周囲の大人から配慮されて安全に遊べている状況も挙げられた。

2) 望むサービス

母親に優しい町になってほしいと望んでおり、具体的には以下の3つが挙げられた。①母親が気軽に集まれる場所がほしい（ファミレスや喫茶店など小さい子どもをもつ親が、気軽に集まることのできる場所が欲しいなど）、②子どもを預けることができる場所が欲しい（息抜きした

い時に、一時預かりしてくれるところが欲しいなど)、③行政に臨むこと(子どもに対するサービスがもっとあるといいなど)

3) 困った時の相談相手

在住期間による違いが見られ、1年未満のもの(転勤などで3年ぐらいを周期に移動してきている人)は近所に相談相手がなく、電話で実母や姉に相談していた。在住歴6年のものは、近所のママ友を挙げていた。その他は、家族(両親、姉、兄、姑)を挙げていた。

4) 社協に望むこと

今回の子育て講座のように、親子みんなで集まる機会の提供を求めている。

5) 災害時の不安と対応

災害時の不安では①土砂崩れによる交通障害(道路が土砂で塞がり、買い物にも行けなかったなど)、②停電(停電し、ガスや電化製品が使えず食事やお風呂に困ったなど)、③川の氾濫(川の近くに住んでいるので、流されるのではないかと心配だったなど)が挙げられた。災害時への備えを話した者はいなかった。

6) その他

設問以外に、①働く場所がない(働きたくても働く場所がないなど)、②ストレスを発散する場所が欲しい(気軽にショッピングをするところがなくてストレスを感じるなど)、③買い物と食事の支度が大変(コンビニやショッピングモールが近くになく1時間以上かけ買い物に行くためある程度の食材をまとめ買いをするなど)、④近所付き合い(近所の人とのかかわりが深いなど)、⑤親との関係(親が1人になってしまうため、引越したくてもできないなど)が挙げられた。

2. 移動児童館に来館した子ども

1) 将来の夢

男の子は、サッカー選手・サッカー監督・競輪選手・オーナーシェフなどが挙げられた。女の子からは、幼稚園や小学校の先生、パテシエなどが挙げられた。

2) 暮らしやすさ

大きく分けて自然や環境に関することと住んでいる人々や生活に関することであった。①自然や環境に関することでは、天竜美林・天竜川など自然が多くきれいであることが挙げられた。②住んでいる人々や生活に関することでは、友達がいっぱいいる・みんな笑っている・年寄りが優しいなどを挙げていた。

3) 暮らしにくさ

①自然や環境に関することでは、道路が狭い、虫がたくさんいて困るなど、②住んでいる人々や生活に関することでは、公園があまりない、店があまりないなどを挙げていた。

IV. 成果

1. 平成7・11・17年調査報告書である『当事者の聴き取り調査報告書』に、平成23年調査結果として加えられ、佐久間地区社会福祉協議会第4次地域福祉活動計画(平成23年度)中間見直し資料として活用される。
2. これまでも佐久間地区社会福祉協議会では、例年各自治区に出向き住民懇談会を開催し直接住

民から要望や生活状況を聴き取ったり、地区民生委員と共に家庭に出向き自分から訴えることの少ない住民の声も聴き取ってきた。今回我々はコミュニティを基盤とした参加型研究として共に調査させていただいたが、調査の5段階、つまり①健康問題を感じ取る、②メンバーを集め組織をつくる、③健康課題を明確にする、④計画をつくり実施する、⑤活動を評価し普及する、のうち、今回は①～③まで協力させていただくことができた。

3. 本学調査協力学生は、1年次生3名、2年次生1名、4年次生1名であった。調査の実施・分析を通して、「住民から直接学ぶ」体験をしたことは今後の学習に生かされていくと思われた。
4. 共同研究者である永井紀子さんより、以下のコメントをいただいた。

『今回の調査では、佐久間町における地域生活の現状と生活課題について、明らかにするために、聖隷クリストファー大学の仲村先生の協力を得て実施いたしました。

調査対象を従来の高齢者や小地域活動団体、子育てサークルだけに絞るのではなく、佐久間町の将来を担うであろう子どもたちの思いを聴きまとめることとした。調査を行う中で、町外調査員（大学生）が入ることによって地元の人には言えない本音や年代が近いからこそ言える率直な気持ちを聴き取ることができたことは大きな収穫である。

第4地域福祉活動計画の思いである「やっぱりここでの暮らしをつづきたい！～地域で助け合いながら～」という願いを叶えていくためには、地域に住む子どもからお年寄りまでの誰もが、役割を持ち地域での住みよさを感じられる町になっていく事が強く望まれているのだと感じた。今後は、子どもたちが感じている自然や環境の良さをより身近に感じられる内容を取り入れた事業の実施や子ども同士での遊べる場づくりをおこなうことで、地域に対する愛着をより強く感じる地域づくりを行っていきたい。また同時に子育て世代の親子に対しては、子育て講座を通じて居場所づくり（くつろぎの場）や仲間づくりの機会を持ち佐久間の地域で子育てを続けていきたいと感じられる地域づくりを取り組んでいく必要を感じた。』